



石版画

イヌイト

カナダ

縦40cm 横45.5cm

北方民族博物館だより  
—第30号—

平成9年度収集資料紹介

寄贈資料紹介・日本民族学会第32回研究大会参加報告

お知らせ・特別展案内

News

2

4

5

6

## 平成9年度収集資料紹介

平成9年度には北海道アイヌ等の実物資料274件とウイルタ民族映像シリーズ41組ほかの映像資料を収集しました。以下には実物資料の概要と主なものを紹介します。また数多くの資料の寄贈を受けています（寄贈資料については、そのつど本誌面に掲載してきましたので、ご参照下さい）。

実物資料の民族別の内訳は以下のとおりです。

北海道アイヌ	ニマイタ他	9件
ニブフ	女性用衣服他	2件
ウイルタ	靴他	19件
ウリチ	弦楽器他	2件
ナーナイ	花嫁衣装、 <sup>そり</sup> 櫛他	147件
ウデヘ	ゆりかご他	38件
コリヤーク	タバコ入れ他	11件
サハ	木製容器他	2件
イヌイト	犬ぞり模型他	23件
ヌートカ	樹皮製あかくみ他	2件
セイリッシュ	石製すりこぎ	2件
アサバスカ	白樺樹皮製容器他	3件
グイッチン	髪どめ他	6件
オジブワ	ナイフ	1件
クリー	手袋	1件
フラットヘッド	ズボン	1件
その他	樺太絵はがき等	6件
		合計274件

平成9年度には、平成8年度の海外民族調査の成果もふまえ、グリーンランドのイヌイトの資料を充実させることができ、昨年度末の企画展でそのうちのいくつかを早速紹介しました。

また、サハリン、アムール川流域に暮らす諸民族の資料を数多く収集することができました。ナーナイの男児、女兒の衣服一揃いや、完成品ばかりではなく、刺繍の型、製作経過がわかるような資料、クロテン毛皮などの素材も収集しています。

（学芸課 笹倉いる美）



ナーナイの花嫁衣装

ユリア=ディミトルヅナ=サマル作（ロシアのコムソモリスク=ナ=アムール在住）。布製で、背一面に刺繍がほどこされています。天上、先祖が住んだ森、今の世界があらわされており、一番下には子孫繁栄を願って「家族の木」が刺繍されています。



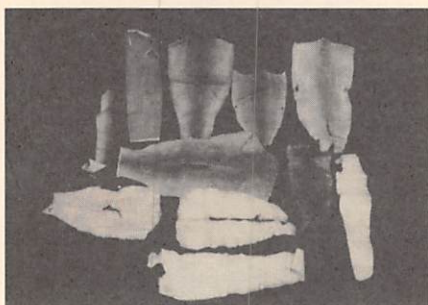
ナーナイの学校セット

ナーナイの小学校で使われていた教科書や、児童の図画、工作などです。ノートには日本の小学生が漢字を練習しているのと同じように、ナーナイ語の同じ単語がいくつも書かれています。



ウデへの水彩画

イワン=イワノヴィッチ=ドゥンカイ作（ロシアのクラスヌイ=ヤール在住）。クラスヌイ=ヤールの博物館長ニコライ=ドゥンカイ氏が語るウデへの昔話に挿し絵としてつけた水彩画で、この写真の資料のほかに17点を収集しました。



魚皮

アムール川で捕れたサケ科の魚、ナマズ、コイのほか、海魚であるオヒョウを含むさまざまな魚のなめし皮。



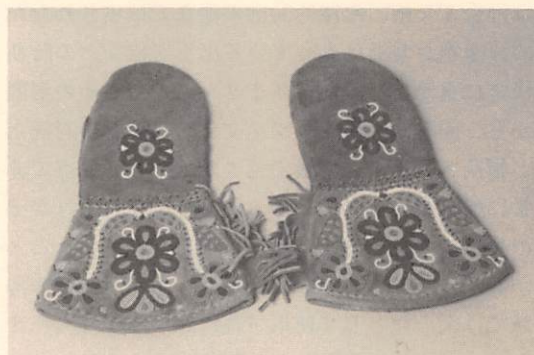
コリヤークの子ども用トナカイ毛皮製帽子

1996年にロシアのスラウトノエで収集されたものです。トナカイの耳がついたままになっています。



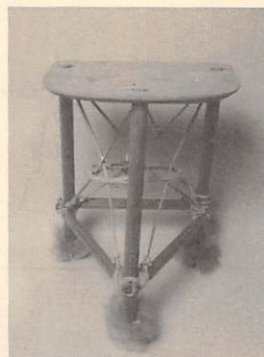
サハの木製容器

1996年にロシアのブラマ村（ヤクーツク市近郊）で収集されたものですが百年以上前のものと言われています。外側一面に彫刻がほどこされた、馬乳酒を入れる容器です。



クリーのムース皮製手袋

1950年頃のものでムース皮にビーズで装飾がほどこされています。



イヌイトの氷上狩猟用椅子

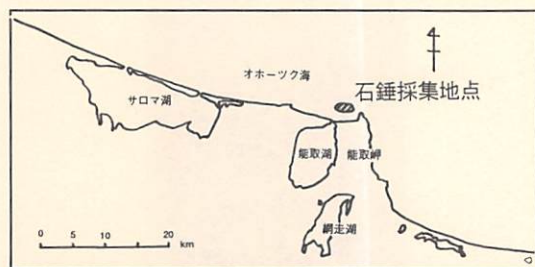
1940年頃グリーンランドのチューレで収集されたものです。製作は1925-30年頃ではないかと伝えられています。氷上狩猟の時に使うもので、椅子の脚には音がしないように、ホッキョクグマ毛皮製のカバーがかけられています。

## オホーツク文化の石錘

平成9年度に網走市内の漁業関係者から石錘が2点寄贈されました(だより27・28号参照)。2点とも能取岬沖でホタテ漁作業中に「八尺」と呼ばれる桁網にかかったものです。オホーツク文化の石錘には、紐通しの穴を穿つ有孔石錘と紐かけ用の溝を巡らす有溝石錘の2種類があり、寄贈の資料はともに有孔石錘でした。石錘は漁撈具で、その用途は網や釣針と共に使用された錘だと考えられています。

考古学的資料である遺物の多くは遺跡の発掘調査などによって陸上で発見されますが、この資料は沖合3km、水深約50mの地点で採集されたため、遺物が普通はもっている出土層位などの時期決定に重要な情報がありません。しかしその形態から、両者ともオホーツク文化の典型的な石錘だと推測されます。海底で見つかったという点で非常に興味深い資料で、オホーツク文化の人々がその付近まで舟を出して漁撈活動を行っていたことがわかります。こうした石錘は、水深50m位の海域では網の錘として使用されたというよりも、オホーツク文化にみられる骨製の大きな釣針と共に底棲魚であるカレイ科の大型魚オヒョウなどの漁で使用されたのではないかと考えています。

(学芸課 稲垣はるな)



上：石錘の採集された海域付近の地図

下：寄贈された石錘のうちの1点。長さ19.8cm重さ1.2kg

## 日本民族学会 第32回研究大会参加報告

福岡市(九州大学・西南学院大学)

上記研究大会に参加したので、北方地域に関する発表について簡単に紹介します(以下、敬称略)。

分科会「イメージとレトリック—自己像にみる狩猟採集民の戦略—」は、「文明」社会やマジョリティー(多数派)がつくり上げてきた採集狩猟民のイメージと、1960年代以降に当事者である民族が創作・操作した自己像について事例をあげ、両者の相関作用を見つめ直そうというものでした。個別の題目は、スチュアート ヘンリ(昭和女子大学・代表者)「民族呼称とイメージ：『イヌイット』の創生と政治」、大村敬一(大阪大学)「イヌイットにとって『賢明』な自己表現とは何か?：『自我』をめぐる民俗倫理」、鈴木清史(帝塚山学院大学)「都市アボリジニのあいだにみる自己イメージの変化」、木名瀬高嗣(東京大学大学院)「観光/運動/自然：アイヌをめぐる錯綜する現代のディスクール」、小川英文(東京外国語大学)「考古学者が提示する狩猟採集民イメージ」の5つで、2人のコメンテーターと会場からは多くのコメントや質問が出されました。当館の研究とも関係の深い内容でした。

このほか、益子待也(金沢学院大学)「北西沿岸インディアンの『美術』と『民族誌』」、岸上伸啓(国立民族学博物館)「カナダ・イヌイットはなぜ南をめざすのか：モンリオール居住のイヌイットの事例を中心に」、稲村哲也(愛知県立大学)「調査報告—モンゴル最北部のトナカイ遊牧民(トゥヴァ族)」、佐々木亨(東北大学)「オロチョンの毛皮獣猟と北満洲における毛皮取引経済」などが報告者の参加したセッションです。そのほか聞くことのできなかった発表の中にも興味深いものがいくつかありました。

会場が九州だったためか、例年より参加者は少ないようでしたが、「『芸術』と『文化』をめぐる」「『現代医療』の文化人類学」「家族と人口の人類学」等の分科会に代表されるように、現代社会に対する人類学の役割についての意欲的な発表も多かったと思います。

(学芸課 齋藤玲子)

## 第13回特別展

## 人、イヌと歩く

## —イヌをめぐる民族誌—

人は長い歴史の中で、いろいろな動物とつきあってきました。中でもイヌ（食肉目イヌ科）は、人とのつながりをもっとも深い動物ではないでしょうか。イヌは人と一緒に暮らしはじめた最初の動物とされており、イスラエルでは約12,000年前の遺跡から人とともに埋葬されたと思われる子イヌの骨が発見されています。また、イヌは人の生活するほとんどすべての地域で普通にみられる動物で、人とのつきあひもたいへん幅広いものになっています。

イヌはペットとしてかわいがられる一方で、地域によっては不潔な動物として嫌われる存在でもあります。また、イヌは世界各地で猟犬、家畜を守る番犬、北方の積雪地域ではそり犬として人の仕事を手助けする動物でもありました。これら以外にも、世界各地でイヌの毛皮や肉の利用といったかたちでの人との関わりもみられます。

この特別展では北方地域をはじめ、広く世界各地の人とイヌの関わりとその歴史について紹介します。

開催期間：1998年7/19（日）～9/27（日）

休館日：毎週月曜日（7月20日は開館）

観覧料：一般250[200]円 高校生・大学生80[50]円

小学生・中学生50[30]円

[ ]内は10名以上の団体料金

## 関連事業

## ■講座 「人とイヌとの関わり」

7/20（月）14:00～15:30 会場：当館講堂

講師：中田篤（当館学芸員）

## ■講演会

「人、イヌと歩く —イヌをめぐる民族誌—」

動物行動学、分子遺伝学、民族学の立場から、人とイヌのさまざまな関わりを紹介します。

9/19（土）13:30～17:00 会場：当館講堂

講師：新妻昭夫氏（恵泉女学園大学）

石黒直隆氏（帯広畜産大学）

池谷和信氏（国立民族学博物館）

## 今号の表紙 — 石版画 —

1985年Alasi Audla作、「ハスキー犬に餌を与える男」。2人の男が銃でアザラシをしとめ、手にナイフをもって今から解体しようとする場面を描いています。獲ったアザラシは凍ってしまう前に、その場で解体して毛皮と肉をとり、残りをイヌたちに与えます。イヌイトにとってイヌは、冬の狩猟に欠かせない移動手段である犬ぞりを引くという以外に、アザラシの呼吸孔を探したり、ホッキョクグマやジャコウウシを追い立てたりする狩猟のパートナーでもありました。

イヌイトの版画の歴史は比較的新しく、1950年代の終わり頃にカナダ・ノースウエスト準州のケープ・ドーセット村で制作されはじめました。その制作技法には日本の伝統的な木版画の手法が取り入れられていますが、ツンドラ地域では木が乏しいために版の素材として木材は使用されず、滑石などの石材が多く用いられてきました。当初から商業的流通を意識して制作されてきたため、モチーフとなる題材は伝統的なイヌイトの生活の一場面や動物がほとんどであり、制作過程においても原画を描く人と彫り師や刷り師というような分業体制が取り入れられています。

みんぞく こうこ はくぶつかん  
in 北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 4/1 オホーツク地方ではまれな縄文<sup>て</sup>期堅穴の重複住居確認：斜里町立知床博物館97年度の遺跡発掘で/D
- 4/8 国に施設づくりを要請：「アイヌの伝統的生活空間の場の再生」整備構想まとまる/M
- 4/14 アイヌ民族博物館に児玉コレクション寄贈：白老で同館学芸員の児玉マリさんより/D
- 4/21 「アイヌ・モシリ」復刻：釧路の市民研究グループが1957～65年発行のユーカラを記録したガリ版刷り小冊子を復刻/M
- 4/22 「江別古墳群」国の史跡に：唯一現存する群集墳の北限として/Y
- 5/8 「アイヌ語講座」オン・エア中：STVラジオ、開講直後から問い合わせ続々/Y
- 5/15 アイヌ語習得、まず歴史から：苫小牧駒沢大でアイヌ語・アイヌ文化の公開講座を無料開講/D
- 5/25 アイヌ民族の狩り再現：白糠では66年ぶりの伝統的なクマ捕り猟などを再現/A S
- 6/3 アイヌ民族共有地返還を：釧路の男性が知事に請求書を提出/D
- 6/11 アイヌ語地名並列表記支援組織結成へ：道も実現へ検討開始/D

\* A S：朝日新聞、D：北海道新聞、M：毎日新聞、Y：読売新聞

複数紙掲載の場合は扱いの大きい方を紹介しています。

## ■執筆著・出版社から贈呈を受けた書籍等（4～6月）

- ・SPb-アイヌプロジェクト調査団  
1998 『ロシア科学アカデミー人類  
民族学博物館所蔵 アイヌ資料目  
録』草風館
- ・『民具マンスリー』20-1～30-12  
神奈川大学日本常民文化研究所
- ・拵嘉一郎 1990 『喜界島風土記』  
平凡社
- ・吉川金次 1991 『鍛冶道具考』平  
凡社
- ・進藤松司 1994 『瀬戸内海西部の  
漁と暮らし』平凡社
- ・橋川俊忠 1998 『芦東山日記』平  
凡社
- ・玉井康之 1997 『現代アラスカの  
学校改革 開かれた学校づくりと生  
涯学習』高文堂出版社
- ・釧路アイヌ文化懇話会 1998 『ア  
イヌ・モシリ 幻のアイヌ語誌復  
刊』
- ・佐藤宏之 1998 『ロシア狩猟文化  
誌』慶友社
- ・渡辺仁ほか 1998 『平成9年度ア  
イヌ民俗文化財調査報告書』
- ・伊藤健次 1996 『大雪山を歩く』  
山と溪谷社

## ■主な来館者（4～6月）

- 4/9 タイ国・カセート大学学長  
Thira Sutabutra氏
- 4/21 東九州女子短期大学  
松田順子教授
- 5/23 駐日フランス大使  
ジャン＝ベルナル・  
ウーヴリュエ氏夫妻
- 6/13 中国・北京大学 嚴文明教授  
東京大学 大貫静夫助教授
- 6/25 韓国・国立中央博物館  
宗義政氏

## ■常設展示観覧者数 30万人突破！

去る6月4日、北方民族博物館は30万人目の常設展示観覧者を迎えました。30万人目の観覧者となったのは神戸市在住で、経済学を専攻する大学4年生の徐治良さんでした。

徐さんはすでに就職先が決まって、社会人になる前に訪れたい、とかねてから思っていた北海道をひとりで旅行中、網走のユースホステルのオーナーの方に勧められて当館に立ち寄ったそうです。「キツネのいる所に来たので、本当にキツネにつままれたのになって感じ。よい思い出になります。」と嬉しそうに語っていました。

徐さんには30万人目の観覧者の証明書と特製テレホンカード、絵はがきセットなどを当館から記念品として差し上げました。



30万人目の観覧者になった徐さん(右)

## ■その他の行事報告

- 4/25(土) 博物館クラブ  
「サミのひも織り」
- 5/5(祝・火) こどもクラフト工房
- 5/23(土) 博物館クラブ  
「イヌイトのヨーヨーづくり」
- 6/13(土) 博物館クラブ  
「くらしに役立つ植物・観察会」

## ■観覧者動向（4～6月）

(名)	
常設展示	
4月	1,360
5月	2,243
6月	4,009
計	7,612

## ■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会平成10年度会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をとおして北の文化を紹介しています。年会費は3000円。すでに会員になられた方は、お知り合いにもご紹介ください。詳しくはお問い合わせを。

## ■行事案内（～10月）

7/19(日)～9/27(日)まで

第13回特別展「人、イヌと歩く  
—イヌをめぐる民族誌—」開催中

9/12(土) 博物館クラブ

「土器づくり(1)」

9/19(土) 講演会「人、イヌと歩く

—イヌをめぐる民族誌—

10/14(水) 講習会

「インディアンのビーズ細工」

10/24(土) 博物館クラブ

「土器づくり(2)」

10/28(水) 講座

「オホーツク土器の話」

## ■編集後記

調査の季節・夏がやってきました。今夏は渡部学芸課長が海外民族調査でカムチャッカへ行きます。道内では各地で発掘調査が行われているので、私も見学に出かけるつもりです。

今号は平成9年度収集資料など資料紹介の多い号になりましたが、当館の収集する資料について展示などからは分かりにくい部分を補うことができれば、と思っています。

(稲垣)